

### Ⅲ 研究の内容

## 1 「気になる子」の理解を深めていくために ～園内研修を通して～

私たちの気にな子は一体どんな子なのだろう。なぜ、気になるのだろうか。どのように援助すればよいのだろうか。私たちはそんな思いで「気になる子」についての討議を繰り返してきた。そこで分かってきたのは、「気になる子」を理解していくための方法は一通りではないということである。それらの中からいくつかを紹介する。それぞれの章には次のような内容が書かれている。

### (1) 子どもの見方を増やす …「気になり方」を出し合う研修会（P28）

私たちはどの様な姿を気になると感じているのだろうか。自分では気になると感じても他の人は気にならないと感じていることもあるだろう。互いにどのような点が気になるのか、話し合ってみなければ分からない。それぞれの「気になり方」を知るということは子どもを見る視点が増えていくことにつながる。多様な視点で子どもを見ていくことが子ども一人一人の深い理解につながっていくと考える。

### (2) 発達の見通しの中で子どもをみる …記録を整理するための研修会（P30）

私たちは一人一人の子どもの記録はたくさん持っている。しかし、その記録を整理してあるだろうか。園内研修会で事例検討する際に必要な内容が書かれているかいないかによって、その子への理解の深まり方が大きく違ってしまう。では、どのような資料があれば、一人一人について理解が深まり、よりよい援助が導き出せるのだろうか。これまで記録の整理の仕方を検討してきた。その中で、発達の見通しの中で子どもを見ていくことが重要であることが分かってきた。

### (3) 援助の方向を明確にする …「気になる姿」の背景を探る研修会（P32）

「気になる子」の中には、発達の見通しがつきにくい子、保育だけでは育ちが支えきれない子、などの様々なケースがある。例えば“友達とトラブルが多い”という同じ様相を見せていても実はその行動を引き起こす背景が違っていると援助の方向が違ってくことに気づいた。そこで、「気になる姿」を引き起こす背景をおおまかに整理してみた。そのことで援助の方向が明確になり、より適切な援助が可能になると考える。

### (4) より深く子どもを理解する …専門的な知識を高める研修会（P34）

専門的な知識があることで援助の手だては多様になる。教員一人一人が専門的な研修会に積極的に参加したり、専門書を読んだりしてその内容を報告し合っていくことで専門的な知識を互いに高め合うことができる。一方で大学の専門家と共に「気になる子」の集団の場での姿を観察することで、その子の行動のもつ意味を理解したり、発達的な課題をつかんだりして、より適切な援助の方法を考えていくことができる。

## (1) 子どもの見方を増やす …「気になり方」を出し合う研修会

自分たちはどのような姿を「気になる姿」と感じているのか、まず研修会で教師一人一人が「気になる姿」を挙げてみた。この「気になり方」は経験年数によって、また担当年齢によっても違っている。指示の意味が分からない、落ち着きがない、こちらの話が理解できない、不安感が強い、気力がない、チックなどの身体症状がある、言葉がはっきりしない、注意が散漫、大人の目を気にする、思い通りにならないと暴れる、話が一方的等々、実に様々であり、それだけ「気になり方」は教員一人一人によって多様であることが分かる。

また、本園で行っている保育を語る会の中でも、参加者（幼稚園、小中等各種学校の教員）に子どもの「気になる姿」についてアンケートを実施したが（p 77参照）、その際にも同じような傾向が表れた。

まずは、それぞれの「気になる子」の事例について研修会で検討していくことにした。その中から事例検討の一部を紹介したい。

### ◆事例1 まき（3歳児）（A教諭の資料をもとに）

（9月）

まきは、しのがスモックを着ようとしていたのを見てボタンを留めてあげようとするが「やめて」と拒まれる。すると、急にまきの目つきが変わり、しのの手や顔をたたき、つねったり、強く握り締めたりして泣かせてしまう。しのが「やだ！やめてー！」というより更に激しくたたき。教師に「どうしてたたいたの？」と聞くと、ふらふらとどこかに行ってしまう。

（担任の心配していること）

どうしてトラブルばかり起こすのだろうか。自分の思いが伝わらないからとすぐに手を出すのは幼いからなのか、何らかのストレスがあるからなのか。また、言い聞かせても話が受け止められていないと感じるが、なぜなのだろうか。

### ◆事例2 やすお（4歳児）（B教諭の資料をもとに）

（5月）

・お弁当の準備になっても、**やすお**はお気に入りのマントを身につけて遊んでいたが、同じグループの**しげのり**に「変なの」と言われてしまった（しげのりは準備をしないやすおが気になっていた様子）。

**やすお**「おまえはぁ・・・ばかぁ！」 **しげのり**「ばかって言っちゃだめなんだよ！」

**やすお**「ばかー！」 **しげのり**「ばかじゃないもん！」

**やすお**「ばーか！・・・ばーか！！」（泣く）

しばらく、泣いて箸をガンガン打ちつけ、弁当が食べられなかった。

（担任の心配していること）

- ・発音がはっきりせず、何を言っているのか聞き取れない。語彙が少ない。
- ・気に入らないことがあると大声で泣き、手がつけれない。
- ・教師が常に一緒にいないと、友達とトラブルになってパニックになってしまうので目が離せない。

これらの事例について出された意見をまとめると以下のとおりである。

#### 事例1について

- ・相手が何もしなくても手が出てしまうのか、それとも何か要因があるのか気になる。
- ・まだ、言い聞かせても分からないのではないか。それでは不快な思いばかりが残るのではないか。それよりも、まきが悪者にならないように周りの子に働きかける必要があるのでは。
- ・3歳児ならこの行動は気にならない。友達に興味はあるが、かかわり方が分からないのでは？そのうち分かる時期がくるだろう。
- ・3歳児クラスではまきよりも別の子のほうが気になる。その子は3歳児なのに先生の言うことを分かりすぎてしまう気がする。母親が厳しく言い聞かせすぎているのではないか。

#### 事例2について

- ・やすおは嫌な気持ちのとき、「ばか」しか表現の仕方を知らないのかもしれない。
- ・感情や出来事を大人が言葉にするというかわかりがこれまでなかったために、語彙が少なかったり状況が分からなかったりするのだろう。
- ・家庭での生活の中での経験が極端に不足しているのかもしれない。言葉以外の部分でも、経験の積み重ねがどの程度であるか気になる。
- ・思いや状況を教師が言葉で表現していくことを繰り返していくことが必要ではないか。

#### 研修会を終えて（研修会を通してA教諭、B教諭の得られたこと）

##### ○子どもを見る視点が増える

- ・A教諭が悩んでいたことが、他の教諭には気にならないこともある。発達の見通しの中でまきの姿を見直してみると、これまで悩んでいたことが解消され、無理に言い聞かせようとしていた援助も今は不要であり、逆に周りの子から守る必要があるという新たな援助の方法も見つかった。
- ・A教諭が気になっていなかった教師の意図を汲んで動いている子が気になるという見方があることを知った。保護者の養育態度が子どもの姿に影響しているという視点が増えた。
- ・B教諭は、その子の行動や表面に表れている事柄に対して気になっていたが、なぜ、そのような行動に表れるのかを考えることで、更に子どもの見方を深めることになった。

##### ○援助の方法が増える（今必要な援助）

- ・B教諭はトラブルの機会をとらえて丁寧に思いを代弁するという方法をとってきた。しかし、日常において出来事や感情を言葉に置き換えていく1対1での経験を十分にすることが必要なことや、言葉以外の遊びの経験も増やしていくことなど、新たな援助のポイントが見つかった。

#### この研修会を続けることで

「気になり方」というのはそれぞれの教師の子どもの見方なのである。互いの見方を話し合うことにより、新たな子どもを見る視点が増えたり、そのことにより新たな援助の方法が見つかったりする。様々な場面での幼児の姿を多様な視点で話し合っていくことを通して、教師間の共通理解と協力体制を築いていくことにつながる。

研修会では一人一人の実態を丁寧に把握していきたい。では、どのような観点で記録を整理すると、より実態が分かりやすく、互いに意見を交わすことができるのだろうか。

## (2) 発達の見通しの中で子どもをみる …記録を整理するための研修会

話し合いに必要な観点を考慮した形式を研究部より提案し、記録を整理することにした。各項目には次のような内容を書いている。

養育環境：家族構成、生育歴（相談機関も含）、保護者の養育態度、本人のとらえ方など、子どもの実態と関係のあることについて書いておく
本人の様子：本人の実態が分かるような特徴的なエピソード、変化が見られたときのエピソードなど
教師のとらえ：エピソードをどのようにとらえたか
援助のポイント：具体的にどのようなことをポイントにして援助しているか

### ◆事例3 リの（4歳児）

養育環境：両親、リの、年子の妹の4人家族である。保護者は家では妹の面倒をよく見てくれ、手伝いもしてくれてとても助かっていて、申し分のない姉だと言っている。

本人の様子	教師のとらえと援助
<p>ああ言えばこう言う（年中4月）</p> <p>10人で園庭でグローブジャングルに乗っている。回すたびに「次は海に行こう」とか「宇宙に行こう」と友達が言うと、「そんなとこ、行けるわけないでしょ。これはグルグルジャングルなんだから！」と強い口調で言い、その場の雰囲気をこわしてにやにやしている。「そんなこと言わないでりのちゃんも一緒に海まで行こうよ。」と声をかけたが、「嫌だね！」と言ってグローブジャングルを回し続ける。「りのちゃんはどこへいきたいの？」と聞くと「べつにどこも」とそっけない返事が返ってきた。</p>	<p>教師のとらえ：</p> <p>嫌なことばかり言う割には一緒に遊びたくないわけではなさそうである。このような表現しかできない訳がありそうなので、そのことには触れずにかかわることにする。</p> <p>援助のポイント</p> <p>否定的な言葉ばかり使っているが、何か理由がありそうなので、りのを否定しないで見守ることにする。</p>

しかし、実際に資料を書いてみると「教師のとらえ」に記述される内容が書く人によって違ってしまうことが問題になった。例えば、上記の「教師のとらえ」には、“子どもの行動の理解と教師のかかわり方”が書かれている。他に“気になっている行動の要因を推測したこと”や“悩んでいること”、“エピソードの中の子どもの気持ちの受け止め”などが記されており、内容に差ができてしまう。上記のエピソードでもそれらの観点で書いてみると、

遊びのイメージをわかせることができない。本当は一緒に遊びたいのだろう。

なぜ、嫌なことばかり言うのだろうか。気になった。ストレスを抱えているのだろうか。

など、記述する内容が違ってしまうのである。この「教師のとらえ」から援助の方向を考えていくのでここは重要な部分である。そこで、この部分に記述する内容を更に検討することにした。

「教師のとらえ」に記述する内容を整理し直す

◆りの（4歳児）

本人の様子	教師のとらえと援助
<p>ああ言えばこう言う（年中4月）</p> <p>10人で園庭でグローブジャングルに乗っている。回すたびに「次は海に行こう」とか「宇宙に行こう」と友達が言う、「そんなとこ、行けるわけないでしょ。これはグルグルジャングルなんだから！」と強い口調で言い、その場の雰囲気をこわしてにやにやしている。「そんなこと言わないでりのちゃんも一緒に海まで行こうよ。」と声をかけたが、「嫌！」と言ってグローブジャングルを回し続ける。「りのちゃんはどこへいきたいの？」と聞くと「べつにどこも」とそっけない返事が返ってきた。</p>	<p><b>幼児の姿の理解</b>            雰囲気をこわすことそのものを楽しんでいるようである。自分に自信がないからそのような表現しかできないのだろう。自分を丸ごと受け止めてもらった経験がないのではないかな。</p> <p><b>発達の課題</b>            身近な大人に丸ごと受け止められる安心感や心地よさを味わい、信頼感をもつことで心を開放して伸び伸びと行動してほしい。</p> <p><b>援助のポイント</b>            りのに対して否定的な言葉は使わない。</p>
<p><b>話し合いの結果、今後の方針を記入するとよい</b></p>	<p><b>今後の具体的な指導方法を決める</b></p>
<p><b>今後の指導の重点</b>            りのに対しては否定的な言葉や態度で接することのないようにする。本当はやりたい気持ちを受け止め、無理に誘うのではなく、教師に親しみをもって一緒に楽しむ経験を増やしていく。</p>	

その姿を分析し、理解する

その子の行動の裏側にある思いを推測し、さらになぜそのような行動に表れているのか。どのような経験を今、必要としているのか考えていく。

発達の見通しの中の課題をつかむ

発達の見通しの中で今必要な経験を考え、どのような姿を期待するか、考えていく。

上記のような姿を目指すためにどのような援助をしていくことが必要か、具体的な援助の方法を考える。

「教師のとらえ」としていた部分は、実は「幼児の姿を発達の見通しの中で理解し、一人一人の課題を把握していく」という内容を示していたのである。

この研修会を続けることで

発達の課題を把握していく過程においては、幼児一人一人の発達の姿を見つめることになり、幼児理解は深まっていく。全職員で一人一人の発達の課題を把握していくことで援助の方向を共通理解していくことができる。

また、この研修会は一人一人の事例検討を継続して記録を重ねていくことに意味がある。継続していくことでその子の変容がより分かりやすくなる。次の担任に引き継ぐ際にも有効である。

しかし、継続していく際に、例えば“友達との関係”などエピソードが同じような視点のものになりがちである。生活や遊びへの取り組みなど多様な視点から、また、様々な場面から実態を把握することで援助の方法が多様になる。

保育の中での一人一人へのかかわり方はこの研修会で分かってきたが、保育の中だけでは援助が難しいケースも多い。多様なケースに対応していくために更に見方を深めていく必要がある。

### (3) 援助の方向を明確にする …「気になる姿」の背景を探る研修会

一見同じような行動でもその子一人一人によってその行動のもつ意味が違っている。友達とのかかわりがうまくできず、暴力的なかかわりをしてしまう幼児の事例を通して一人一人の行動の背景を探りながら必要な援助を導き出していきたい。

#### ◆事例4 ジュン（4歳児5月）

箱積み木場で「ここ、警察にしよう」と2、3人で気があってベルトや剣、鉄砲などをつくって張り切って遊び始めた。しばらくすると、「先生、ジュンが僕のこと捕まえる！」と何人もの子から苦情があがった。教師がそのことを説明したが、「警察だから捕まえるんだ」と言い、「悪い奴はこいつだ！」とある子を指さす。「違うよ！」とその子が言った瞬間ジュンは相手を蹴ってしまった。

#### ◆事例5 ひでき（5歳児10月）

友達と一緒に蕎麦屋さんごっこをしていた。しばらく続いていたが、突然相手をたたいてしまった。教師が話を聞いてみると「ぼく、悪いってわかっているんだけどやっちゃうんだよ。あっと思う前にやっちゃうんだ。」と言う。自分のやり方で一心に作っていたときに、自分の思いと違うことをされ、加減をせずたたいてしまったようだ。

#### ◆事例6 はるき（4歳児1月）

縄跳びが跳びたくて何度も練習しても失敗してしまうはるき。「どうして跳べないんだよー！」とパニックになっていた。もう一度、練習し始めたとき、足下にあった遊具を寄せてあげようとやすえが手を出すと、失敗してしまった。すると、「こいつがぼく畏にを仕掛けようとするんだ。」と殴りかかった。やすえの気持ちを代弁してみたが、なかなか興奮状態がおさまらなかった。

友達とのかかわりがうまくできず、暴力的なかかわりをしてしまう  
…友達とのかかわり方が分からない

#### 行動の背景として考えられること

- ・初めての集団生活であること
- ・同年代の子ども同士で遊んだ経験がないこと

→発達上の問題（経験不足、偏りなど）

教師の見方や保育を工夫していく  
同年齢の幼児の中で生活しながら経験を増やしていく。友達への気持ちの伝え方や相手が嫌な思いをしていることを、体験を通して知っていけるようにする。

#### 保護者の様子

「家で私が暴力を振っているからひできが暴力的なんだ」と他の保護者に言われたと母親が泣いて訴えてきた。ひできは家では「僕は誰も友達がいらない。誰も僕を分かってくれない。」と訴えているようで母親は不安定になっている。毎朝、「頼むからお友達たかないでね。ママ、他のお母さんたちに怒られちゃうから。」と約束しているという。

#### 行動の背景として考えられること

- ・同年代の子ども同士で遊んだ経験が少ないこと
- ・母親の感情が不安定なこと

→生育環境や親の養育態度

#### 保育の工夫+保護者への支援

保育の中でひできが心を動かしかかっている遊びを見つけて、自信をつけていくと同時に、母親にはひできのよい姿を中心に伝えていく。  
→母親の意識の変化につながる（P37から参照）

#### 行動の背景として考えられること

- ・相手の気持ちの理解ができにくいこと・・・発達のアンバランスさ

→発達の障害  
又はその疑い

#### 保育の工夫+保護者への支援

##### +専門機関との連携

あいまいな表現ではなく明確な指示により混乱が少なくなる。本人が状況を把握しやすい方法を保護者と共に考えていく。母親との信頼関係を作っていくことにより、専門家のアドバイスを受け、更に適切な援助ができるようにしていく。（P50から参照）



この三つの事例のように他の事例からも背景をおおまかに整理してみるとそれぞれの援助の方向が分かりやすくなった。

**A：発達上の問題（経験の少なさ、経験の偏りなどが要因）**

⇒教師の見方や保育の工夫をすることが主な課題となる

経験が極端に少なかったり、偏っていたりする場合には、保育の中で経験を増やしていくことで育っていくことが予想される。そのためには、保育の中でどのようにその経験を増やしていけるか、どのような経験が必要か考えることが課題となる。

**B：生育環境や保護者の養育態度が要因**

（感情の育ちや経験の偏り、ゆがみなどが要因）

⇒教師の見方や保育の工夫をすることに加え、親の意識を啓蒙する

保護者の養育環境が大きく影響をしていることが予想される場合は、保育を工夫していくことも必要であるが、それと同時に保護者も一緒にかかわり方を改善していくことが必要になってくる。

**C：発達の障害又はその疑いが要因となって**

⇒教師の見方や保育を工夫すること、保護者と連携することに加え、園外や外部専門機関との連携を図り、適切な援助を探る

保育の中で工夫しても育ちがアンバランスだったり、何らかの発達の障害が疑われたりする場合は、どのように支えていくことで、その子が状況を把握できたり過ごしやすくなったりするのか、保護者と信頼関係を築いていくことで専門家の意見も反映しながら援助の方法を考えていく。

**D：心の問題（教師や保護者の問題意識が薄い、気になることが顕著でないで見落としがち）**

⇒複数の教師や外部の専門的な人など、様々な視点から子どもを見ることで新たな見方が増えたり、問題意識が高まったりする。

今は問題行動として表れていないが、思春期までを見通すと大きな心の問題をかかえている。教師と保護者が問題意識をもって、今必要な援助を明確にしていく。

**この研修会を続けることで**

これらの背景は実は複雑に入り混じっていて明確にわけることほできない。しかし、大まかにとらえることによって援助の方向が分かりやすくなるので、その中で一人一人に細やかな援助の方法を検討できる。

以上のことから保護者や専門機関との連携の在り方など更に課題が見えてきた。これらのことについてはP37から詳しく述べている。また、様々な事例に対してより深く子どもを理解していくために、専門的な知識を高めていく必要があると考える。



#### (4) より深く子どもを理解する …専門的な知識を高める研修会

日々の生活の中で一人一人の理解を深めてくることができたが、専門的な知識があることで、より理解が深まり、適切な援助が可能になることも多いだろう。

そのために、教員一人一人が特別支援に関する研修や発達障害の理解を深める研修に積極的に参加したり、文献を読んだりして自分で得た知識を研修会で報告し合い、互いに専門的な知識を高め合ってきた。

また、本園では年に何度か学部の障害児教育の担当教員や附属特別支援学校教員らとともに集団の場面での幼児の様子を参観し、参観後に話し合いをもつことを続けてきている。その一例を紹介したい。なお、園外の方と共に参観する際のポイントを左の欄に記している。

#### ◆ゆきえの場合（4歳児1月）

##### 幼児の実態をまとめ ておく

※幼児の実態と同時に援助をしていく上での現在の悩みなどをまとめておく

##### 子どもの様子

楽しみ会に向かう生活の中で  
～はりきる場面と意識が  
飛んでしまう場面～

##### ○クラスでの様子

クラスでの活動ではこのところボーッとすることが多く、お弁当の時間もまったく意識が食事に向いておらず、「お弁当だよ。」と声をかけると少し視線が動くが、またすぐにボーッとしてしまう。お弁当を食べ始めても食べ物を口いっぱいに入れたまま、うつろな目をして行動が止まっている。何度か声をかけるが全く食事は進まなかった。

##### ○楽しみ会の異年齢保育の中での様子

一方、楽しみ会に向けては、年中長組で縦割りのグループを作って活動している。ゆきえは年長組の部屋に行って年長組の先生と一緒に活動している。同じクラスの友達と楽しそうにふざけっこをしている。また、年長組のまちこと追いかけてっこをして楽しんでいた。

##### 教師の悩み

何をしたらよいのか分からない時や遊びの合間などに意識が飛んでいるような様子が見られる。その時は肩をたたいて名前を呼んでも気付かないことが多くなった。

意識に波がある。以前は周りの子がしていることを見て同じようにやるなどしていたが周りの子の行動が速くなったために、ついていけなくなったのだろうか。

##### 集団での場面を参観 する

※どのような場面を見てもらいたいと考えてその日の保育を構成する

日常の様子をとともに見る。この事例では、クラスでの様子と異年齢での様子の違いが分かるような一日の組立てにした。

**参観後に話し合いをもつ**

※実際の姿を見てもらい、アドバイスを受ける



**話し合いの観点で生活を見直す**



**援助の方法を見直す**

場面によって様子が大きく違っていることから、普段とは違った環境がゆきえにとっての刺激となって意識が覚醒されているのかもしれない。日常においてはもしかすると意識の覚醒水準が低いのかかもしれないということが話題になった。

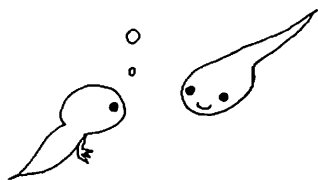
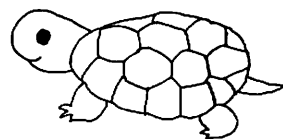
- ・外でお弁当を食べると虫が怖くてとても早くお弁当を食べている。
- ・まゆみがしきりに話しかけているときには受け答えができています。
- ・朝一番にトランポリンで跳ねることで楽しく活動に向かう。
- ・男の子と一緒に戦いごっこならはりきってやっている。

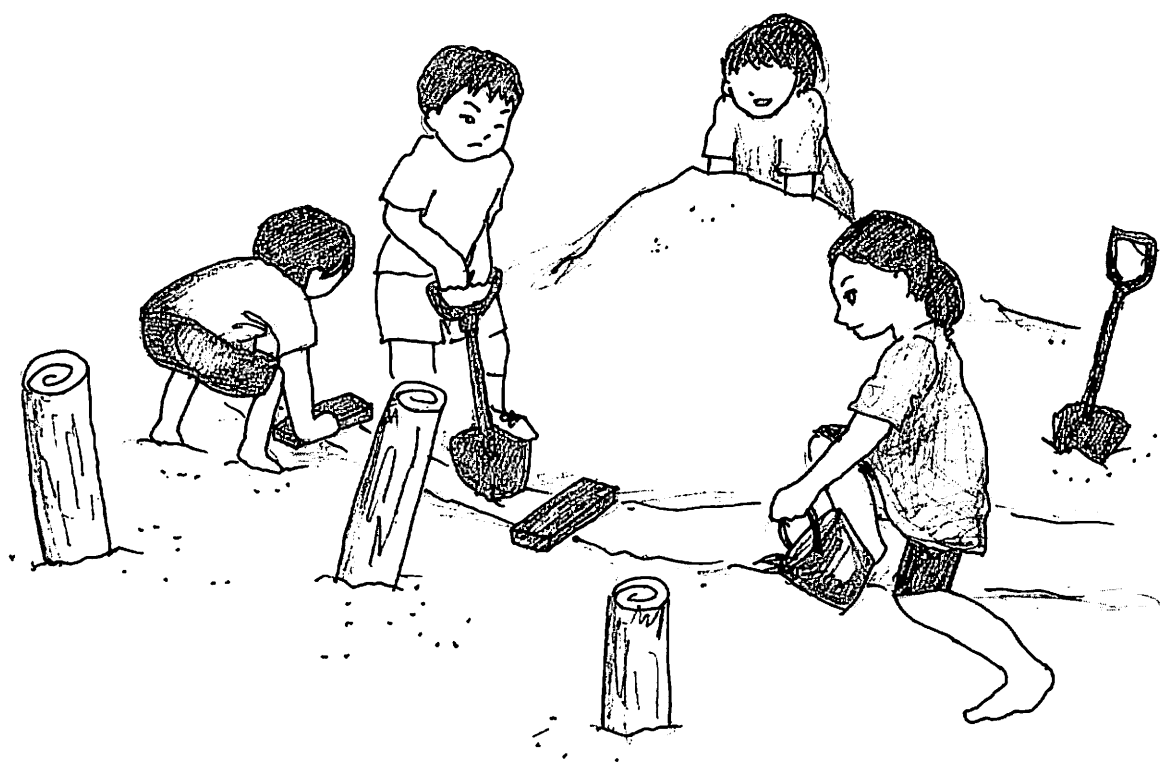
など刺激があることで活動的になることに気付いた。

クラスでは何かと世話をやきたがるまゆみと一緒にいることで、ゆきえが常に覚醒された状態でいられるので、二人で遊ぶことを見守ることにする。また、意識が覚醒されるような環境を工夫する。

**この研修会を続けることで**

専門的な知識が増えることで、これまでの子どもの見方や援助が適切であるか見直すことができる。また、新たな援助の方法も増え、その後の生活の中で活かしていくことが可能になる。





## 2 保護者を支えていくために

子どもたちの「気になる行動」の背景には必ずといっていいほど家庭環境がかかわっている。保護者が変われば子どもが変わることも多々あるだろう。しかし、だからといって、一方的に園からの要望を保護者に伝えるだけでは、当然保護者は受け入れてくれない。またそれでは保護者を支えたことにはならない。保護者を支えながら保護者自身の子育てに関する自立心を育てることで間接的に子どもたちを支えることになるのだが、それは具体的にどのようなことなのだろうか。ある「気になる子」を例に担任と保護者のやりとりを下記の3つの過程に分け、そのときに大切にしなければならないポイントを記してみた。この過程はどの子にもあてはまるものではなく、それぞれの子どもや保護者によって様々な軌跡をたどり、時には行きつ戻りつするものでもある。しかし、そのときに大切にしたいポイントはどのケースも変わらないと思っている。それぞれの章には次のような内容が書かれている。

### (1) 保護者の思いを受け入れ、関係をつくる (P38)

教師からのメッセージを保護者が誠意をもって受け止めてくれるかどうかは、最初により関係を作れるかどうかにかかっている。よい関係をつくるために、日頃から様々な方法で幼稚園の教育方針を伝え、幼稚園に対して理解をしてもらう努力をすることは大前提であることを述べておこう。それを踏まえたうえで、ここでは、まず、家庭での子どもの様子を聞きながら、子育ての悩みや不安、幼稚園への要望などを聞くことで、保護者と話しやすい関係を作り、保護者の子育て感、親そのものの気質、これまでその子が置かれていた環境、また実際の子どもの姿と親の要求のギャップなどを探りながら会話をしている。そのことを踏まえてもう一度子どもを見直すと、その子がどうしてそのような行動をとるのか理解することができることが多い。そこから、そのような保護者に育てられてきたという条件も含めて、次の手立てを見出し、実行してみることが大切である。

### (2) 課題を共有する (P40)

教師と保護者はそれぞれの立場で子どもを見ているので、課題を共有することは難しい。しかし、その子を理解し、その子にとって今どのような経験が必要なのかを了解し合って園と家庭両方で教育していかなければ子どもが迷ってしまう。お互いの子どもの見方をすりあわせながら繰り返し話をしなければならないので、時間がかかるところであるが、根気強く伝えていく必要がある。

### (3) 具体的な教育方法を共に考える (P44)

園で生活している時間は一日のうちのたった4、5時間である。それ以外は家庭で過ごすことが多い子どもにとって家庭での過ごし方がその子の行動に大きな影響を及ぼしていることはいままでもない。子どもの課題はよくわかっていても、実際どのように教育したらよいのか、また理想論は語れても目の前の自分の子どもにどのような言葉をかけたらいいのかわからずに毎日を過ごしている保護者は実は少なくない。そのような保護者には「このように子どもに接してほしい」と伝えたいのだが、伝え方には工夫がいる。また、教育相談機関も積極的に利用してほしいのだが、その話題を出すまでも工夫が必要である。

# (1) 保護者の思いを受け入れ、関係をつくる

子どもの姿や教師の援助・対応	保護者の反応
<p>「雑踏が苦手？」 (5歳児 5月)</p> <p>小学生が紙飛行機をもって幼稚園に遊びに来た。クラスの子は紙飛行機の折り方を教えてもらいながら一緒に遊んでいたが、かなこは部屋の隅の方で壁に向かってひざを抱え、すすり泣いていた。教師が誘ってもその場から動くことさえ拒んだ。</p>	
<p>かなこは普段から大人しく友達と一緒に遊ぶことも自分から友達に話しかけることもあまりなく気になっていた。だから、小学生との交流では小学生とはかかわりをもたないことは予想していたが、反応が予想以上に過剰だと思った。今後の指導の方針を探るためにかなこの家庭での様子や育った環境などを知りたいと思い、その日、保護者に話をきいた。</p>	
<p>教師：今日、小学校との交流があって、かなこちゃんがかなこちゃんらしさを出せずに終わってしまったんです。きっとたくさんの小学生が来たから、びっくりしちゃってどうやってかわっていいのかわからなくなってしまったんだと思うんですけど、つらい時間を過ごしてしまったかもしれません。お家でも人見知りをしたりたくさんの人がいるところが苦手だったりするような傾向はありますか？それを知っていれば次はもっと早い段階でかなこちゃんを支えられると思うんですけど。</p>	
<p>母親：実は毎日幼稚園に行きたくないって言ってるんですよ。今日は特に行きたくないと言いました。私はかなこに仲のいい友達がいなくて心配なんです。家ではとってもききわけのいい妹の面倒をよく見る理想のお姉ちゃんなんですけど…。幼稚園でのかなこの姿が信じられないんです。</p>	

## ポイント1

その子の行動が気になると思ったらまずは保育の中で様々な状況をつくり子どもの様子をよく見てみることに、さらに改善策を考え努力してやる必要がある。それでも気になるときに、子どもが自分らしさを発揮できないときに保護者に相談するタイミングなのではないだろうか。

## ポイント2

事実を柔和に伝えながら指導が至らなかったことを認め、保育者としての悩みを素直に打ち明ける。決して家庭教育のせいだけにしてはならない。

教師：そうでしたか。幼稚園から帰った後はどのようなことをして過ごしているんですか？もし、好きな遊びや好きなものがあったら今後の保育にとりいれていこうと思うので教えてください。

母親：空き箱などで何かを作ることは大好きです。あとは公園に行くと砂場に座り込んでいることが多いかな。

教師：ありがとうございました。かなちゃんが幼稚園で夢中になれる遊びを見つけてみます。かなちゃんが幼稚園に来るのが楽しくなることが今一番大切なことだと思います。かなちゃんが楽しいと思う遊びを通して友達とのかかわりも少しずつ増やしていきますね。少しの間、見守っていただければか。

母親の理想とする子ども像と実際のかなこの姿にギャップを感じた。また、かなこに対する期待も大きいのではないかと感じた。まずは目の前のかなこをしっかりと理解してもらいたいと思ったが、保育でかなこが自己発揮できる方策を探りながらかなこが変化していく様子を伝えるとともに、徐々に問題の所在を伝えていこうと思った。

教師と話をしたこと、教師が気にかけていることを知り、少し安心した表情で帰った。

### ポイント3

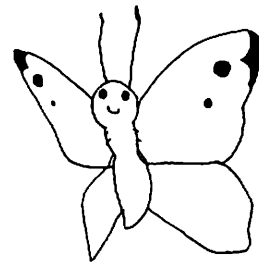
会話をかわしながら保護者自身の気質を探り、どのような伝え方をしたら理解してもらえるか考える。

### ポイント4

保護者の悩みにもふれながら、見通しをもった今後の保育の方針を具体的に説明する。

### ポイント5

日常から保護者に声をかけるなど話しやすい関係を作っておくことが大切である。



## (2) 課題を共有する

子どもの姿や教師の援助・対応	保護者の反応
<p data-bbox="201 331 648 367">「お水をあげてくる」(5歳児5月)</p> <p data-bbox="201 376 648 965">かなこが、畑の野菜をじっと見ている。教師が「かなちゃん、お水あげてくれる？」と声をかけるとうれしそうにうなずいた。そして水やりをした後、「先生、草むしりって知ってる？かなこ上手なんだよ。やってあげようか？」というので「助かるわ～。先生にもやり方教えて！一緒にやろう！」という生き生きとした表情で畑で活動した。次の日から、登園すると真っ先に畑の水やりをするようになり、登園をしぶらなくなってきた。</p> <p data-bbox="201 1032 648 1361">かなこの心が動くものが一つ見つかったと思った瞬間だった。このことを早く保護者に知らせてあげたいと思うと同時に、登園したら次は何をするか決まっているなど、ある時間は何をするのかははっきり分かった方がかなこは生活しやすいのかもしれないと思った。</p> <p data-bbox="201 1413 1028 1487">教師：最近、かなこちゃんが畑の野菜の世話を一生懸命してくれているんですよ。草むしりの仕方も教えてもらいました。</p> <p data-bbox="201 1570 1028 1778">保護者：かなこもそのことはよく話してくれます。今日はなすの花が咲きそうだとトマトが大きくなったとか……。おかげさまで、幼稚園に行くのは楽しみになってきたみたいです。実は先日かなこと一緒に庭に畑をつくってみました。それがよかったのかな……。 </p> <p data-bbox="201 1861 1028 2018">教師：そうだったんですか。家庭での経験が生きているんですね。いい経験をしましたね。かなこちゃんはやっとな自分のやりたいこと、これならやれると思ったことが見つかったんです。4月とは比べものにならないほどいい表情をしてるじゃないですか。</p>	<p data-bbox="1090 568 1244 607"><b>ポイント6</b></p> <p data-bbox="1090 622 1387 1093">子どもが変わってきたことを報告する際に、いい方向に変わってきたこともたくさん報告するべきである。特に過干渉や心配性の保護者にはその割合を多くするなど個々の保護者のタイプによって伝える内容を考える。</p> <p data-bbox="1090 1637 1244 1675"><b>ポイント7</b></p> <p data-bbox="1090 1691 1387 2011">子どもの変化を伝えながら家庭でどのような経験をするのがよいのかを伝える。また保護者の努力を認めることで保護者が自信がもてるように支える。</p>



保護者：そうですね。幼稚園に行きたいといってくれて少し安心しています。やりたいことがあるとそんなに変わるものなんですね。小さい妹がいるということを理由にして、これまでかなこのやりたいことをやらせてあげなかったかな…？

教師：ずっと大人の言うことを忠実に守ってきたかなちゃんにとっては、もしかしたら朝幼稚園に来たら水やりをして、次はこれをやって、次がこれ…というようにやることが決まっていた方が安心して生活できるのかもしれないね。明日からかなちゃんと一日の流れを決めてしばらく流れを変えずに生活してみます。

保護者：お願いします。相変わらず友達の名前は話題にでないんですけど、そうしているうちに友達ができますかね？

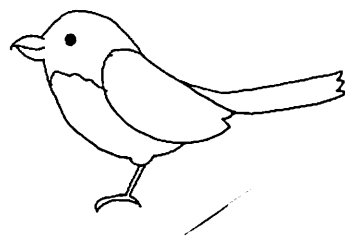
教師：かなちゃんが楽しそうに活動していればそこに友達は集まってくるものですよ。私も意識して友達とつながりができるように援助していきますね。畑には他の子もかかわっていますから、一緒に草むしりをしながら友達の会話をきいて笑ったり会話に加わったりしていますよ。

保護者はまだ、「かなこに友達がいないこと」を気にしてはいるが、かなこの表情が変わってきたことで、これまでの自分の子育てを振り返るようになってきている。安心させながらも保護者の子育て観を更に揺さぶって、かなこへの接し方などについて考えてもらう機会になればよいと思った。

かなこの新たな一面を見てかかわり方を少し変えてみようかと考えている。不安で仕方なかった状態から少し解決策が見出せそうな気がしているようだ。

#### ポイント 8

これまでの保護者の子育て観に触れて心を揺さぶり、そのことを考慮しながら次の保育方針を立て、それを明確に伝える。しかし、子育て観に触れることによってこれまでの信頼関係が崩れることもあるので、保護者の考え方も尊重しながらタイミングや伝え方については十分検討する。



「なんで泣いてるの？」

(5歳児6月)

前庭の一角で泥を使って女の子5人が遊んでいる。その中にかなこも入っている。遊びをリードしているはるえに誘ってもらったらしい。かなこの表情は実に楽しそうである。

次の日、またはるえがかなこを誘いに来た。はるえがかなこに「さあ、今日も手伝ってもらいますよ」と冗談交じりに言って「先にいってるからね」と外に出て行った。するとかなこはその場に立ち尽くし、両手で顔を覆ってさめざめと泣き始めた。再びかなこを誘いに来たはるえは不思議そうに「なんで泣いてるの？」とかなこの顔をのぞきこんだ。

はるえの言い方が嫌だったのか、他に自分のやりたいことがあったのに誘われてしまったからなのか、かなこが泣いている本当の理由はわからなかったが、これではかなこも友達の中にいることは辛いし、周りの友達にも誤解を招いてしまうだろうと思った。これまで友達との接点をつくるために保育の中で様々な工夫をしてきたが、極度に人とかかわることが苦手なのだとしたら、そのことでかなこを逆に苦しめていたのかもしれないと思った。保護者が一番気にしているかなこの友達との関係についてそろそろ事実を伝えて、人とのかかわり方について園外ではどうなのか情報がほしいと思った。この場合は、事実をはっきりと伝えて問題の所在にせまろうとしていたので、感情的になりやすい母親の他に父親にも来てもらい、立ち話ではなく保育室で話をした。

#### ポイント9

保護者に伝えたいことがあるとき誰にどこでどのように伝えるかで同じ内容でも相手への伝わり方が変わってくる。伝えたい内容の重要性などの他に、保護者の気質などによっても伝え方を工夫しなければならない。

教師：かなこちゃん、今日友達に遊びに誘われたんだけど、泣いて友達のところに行かなかったんです。きのう一緒に遊んでいたの友達に当然今日も遊ぶと思って誘いに来たようだったんですけど・・・。園外でもそのようなことはありますか？

保護者：時々同じようなことがあるんです。公園なんかで誘ってくれる友達がいるんですけど、自分から拒否して友達とは遊ばないんですよね。

教師：そのとき遊ばない理由がありますか？例えば今やりたい遊びがあるのに断れないとか特定の誰かがいるから遊ぶのは嫌だとか。

保護者：いいえ、理由はないと思うんです。理由があって遊ばないのなら私たちも心配しないんですけど。

教師：そうでしたか。これまで私は保育の中でかなちゃんと友達の接点をつくることを心がけてきました。だから、かなちゃんと一緒に遊びながら周りの子を誘ってみたりかなちゃんの得意なことを周りの子に広めたりしてかかわるきっかけを作ってきました。でも、もしかしたらかなちゃんにとってそれはつらいことだったのかもしれないね。

保護者：うちの子は何か障害があるんでしょうか？もうどれが本当のかなこなのかわからなくなってしまって・・・。

教師：どの姿もかなちゃんですよ。目の前のかなちゃんの姿を受け止めて理解してあげましょうよ。障害があるかどうかではなくて、その子が生きていくために必要なことを存分に発揮しながら生きていけるようにサポートしてあげたいと思うんです。かなちゃんには、今どのような経験が必要なのか一緒に考えましょう。

保護者は、これらのことに薄々気付いているのに、自分の中で否定し続けているのではないかと思ったので思い切って自分が思っていたことを正直に伝えた。保護者の気持ちを見ると心が痛み辛かったが、かなこのためにはかなこのありのままの姿を受け入れ、かなこにとって最高の教育環境が見つかることを願って、事実とこれまで自分のしてきたことを誠意をもって伝えた。

まだ半信半疑であり、これからどうしたらよいのか戸惑っていることが表情からわかったが、今回ばかりは受け入れなければならないという覚悟もあり、両親で話し合うことを約束してくれた。

#### ポイント10

すぐに障害があるかないかという話題になりがちであるが、教師はその子の特性を理解しその子に応じた教育をするという幼児教育の基本を忘れてはならない。またその基本理念を保護者に分かりやすく説明する責任がある。たとえ発達障害が疑われ、教育相談機関への相談を勧めたいと思ったときも、保護者が冷静にそのことを受け入れられるかどうかを見計らって、タイミングをとらえることが大切である。



### (3) 具体的な教育方法を共に考える

子どもの姿や教師の援助・対応	保護者の反応
<p>「何がなんだか分からない」 (5歳児 7月)</p> <p>クラスみんなで夏休みの前に自分の引き出しを整理しているときである。「クレヨンと自由画帳とはさみだけは引き出しにおいて後のものは持って帰りましょう」と子供たちに投げかけた。子供たちはそれぞれに引き出しを整理しだし、友達とおしゃべりしたり笑いあったりしながら楽しそうである。すると突然、かなこが激しく声をあげて泣き出した。理由をたずねるが、泣きじゃくっていて何も答えない。引き出しはもっているが、中に入っているものに手をつけた形跡はなかった。</p> <p>教師の一斉の投げかけでは何を言われているかわからない子はいたが、その子たちもやりながら教師に確認しに來たり友達の動きを見て自分なりに行動したりして楽しそうに引き出しの整理をしていた。かなこはこのクラス全体がざわざわとしている雑踏の雰囲気が耐えられず、またその中で完璧にやらなくてはならないという思いが頭の中に渦巻いて行動できなくなってしまったのだらうと考えた。そこまでかなこの行動を制限する理由とこれからの対策を保護者と話し合った。</p> <p>教師：私の投げかけ方が丁寧ではなかったのかもしれません。すみません。でも、わからないときには泣かずに他の方法があるということを知らせたいと思うんですけど…</p> <p>保護者：完璧主義なんですよ。ある意味神経質というか…たぶん、先生に言われたことはきちんとやらなければいけないと思っているんでしょうね。</p> <p>教師：でも、その思いが強すぎてどうしたらいいのかわからなくなってる感じがするんです。完璧にできなくてもいい、できないときだってあるという気持ちがないとこの先どんどん追い込まれていってしまうのではないかと心配です。</p>	



保護者：そのつもりはなかったんですけど、もしかしたら知らず知らずのうちにそうになっていたのかもしれない。

この後、母親はかなこが乳児のときも他の子より反応が鈍く、障害があるかもしれないと疑ったこと、その後の検診でよい育ちをしていると言われうれしくなって早期教育を始めたこと、下の子が生まれ自分のことは自分でするように厳しくしつけたことなどを語った。

教師：いろいろなことが重なってしまったんですね。お母さんも辛かったでしょう。これからしばらくの間、家庭でも園でも「～しなさい」というかなこちゃんへの指示を減らすこと、完璧にできなくてもかなこちゃんへ否定の言葉をかけずに、例えば「そんなにできたの。後は私に手伝わせてね」なんて肯定的な言葉をかけてあげることにしませんか？

保護者：分かりました。やってみます。

教師：もう一つお願いがあるんです。私はもっとかなこちゃんらしさを発揮できるような教育環境をつくってあげたいんです。でも、私の力量不足でいい方法が見つからないんです。もしよかったら市の相談機関にかなこちゃんに行ってみてはいただけないでしょうか。そこで、専門家のアドバイスがもらえればもっといい方法が保育に生かせると思うんです。

これまで築き上げてきた保護者との信頼関係を信じていたので、はっきりと自分の考えを伝えることができた。この日の話が保護者に受け入れてもらえたのはこれまで共に悩んできた過程があったからだと自負している。

市の教育相談のことは知っていて、いつその話を持ちだそうかと悩んでいたらしく、すぐに連絡して相談の手続きをしてくれた。

#### ポイント11

家庭への課題をだすときは抽象的な表現では伝わらないことが多いので具体的な場面や言葉をあげながら説明する。

#### ポイント12

教育相談機関が発達障害に関するだけのものと誤解をし、抵抗を感じている保護者が多いが、相談機関の役割を説明し、相談することで新たな手立てが見つかる可能性があり、どの子も利用した方がよいことを主張する。  
(他機関との連携についてはP50参照)

「先生、きいてください。今となっては笑い話なんですけど…」

こう言って4歳児の保護者たちはこれまでの子育てを教師に語りだした。そして「信じられないでしょうけど、そのときは真剣だったんです…」と付け加えた。

私が一生懸命育てなければ…正しい子育てをしなければ…核家族で地域とのつながりも薄く、孤独感が募る中、情報ばかりがあふれ、何を選択してよいのか分からなくなり、自分を見失っている親たちの現実がそこにあった。

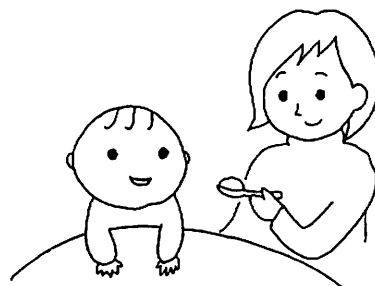
「このような親に育てられたら子どもたちはどうになってしまうのか。」と子どもたちの将来を懸念するが、これからこのような親はますます増えていくことが予想される。幼児を預かる機関として、この現実を十分に受け止め、保護者と連携を深めながら子どもたちの将来を考え、子供も親も支えていかなければならないと思っている。

#### (その1)「丈夫な子に育てほしいから…」

離乳食になったとき、どのようなものを食べさせたらいいのか分からなくて、育児書を10冊買ってきたんです。そしたらその中に、一日に必要な栄養とその量が書いてある本があったんです。別の本には一日30品目の食品をとるように書いてあったので、計算機を使って炭水化物、たんぱく質、ミネラル、ビタミン、カロチン…などがきちんと必要な量だけ取れるように計算して、3か月分の献立を作りました。もちろん、一日30品目はその中に織り込みました。

毎日毎食、献立どおりに料理をして、それを一食2時間かけて子供に食べさせました。残すことは許しませんでした。それを食べないと病気になってしまうと思っていたからです。当時は乳児用ミルクはありがたいとよく思ったものです…。

でもそれを続けていたら、満3歳で19キロになってしまったんです。今考えれば当然ですよ。作るのに2時間、食べるのに2時間かかるので、遊んだり運動したりする時間はありませんし、動かないからおなかもすかないのでさらに食べるのに時間がかかるし…おまけに子どもは外で遊ぶという丈夫な子に必要な経験をほとんどしないまま、幼稚園に入園してしまったんです。今考えると恐ろしいことで



（その2）「これからの子は英語ぐらいできないと…」

国際社会に生きるために、小さいうちから英語を日常生活に取り入れようと、英語を取り入れている乳幼児機関に0歳児から通わせました。そこでは息子が寝ているベッドのそばで英語で「ももたろう」の話が流れていました。息子はそのそばですやすや寝ていましたので、そのときは、英語のリズムが心地いいのだろう、息子は天才かもしれないと思って喜んで連れていってました。

家に帰ってくると疲れるのか、午後もずっと寝ていましたので、外に連れ出すことはほとんどありませんでした。

5歳になった今…息子はまったく英語は覚えていません。



（その3）「いつかできるようになるから

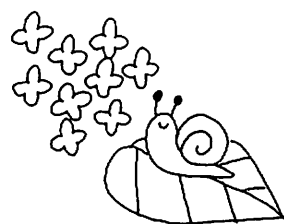
無理強いはいしないと決め…」

おむつをとるのも、箸を使うのも、子どもがやりたがるまでやらせませんでした。放っておけばそのうちやりたがって、自然にできるようになると思っていたのです。

無理強いして嫌がるのが一番いけないことだと聞いたので何も教えませんでした。

だから、何もできないまま幼稚園に入れてしまいました。幼稚園でお友達がやっているのを見ればやりたがると思っていたのです。

幼稚園に入って周りの子ができるのに、自分だけできないことが分かり、すっかり自信を失ってしまった子どもの姿に愕然としました。子供がやりたくなるように仕向けて少しずつ子供に教え、できることが増えることが自信につながって、それがまた、次の原動力になるということに気が付いたのはずっと後のことでした。



（その4）「自分のことは自分でできないと

先生に迷惑をかけてしまうと思い…」

幼稚園に行くので自分の身の周りの始末は自分でしてほしいと思い、毎日公園へ連れ出し、幼稚園のシュミレーションをしました。朝、子どもに自分でお弁当をつめさせて、ハンカチ、ティッシュと共にかばんに入れ、上着を着て身支度を整え出かけていき、公園でお弁当を出して食べて、きれいに片付ける練習をしました。さらに、帰ってきたら上着、かばんをラックにかけて、手洗い、うがいをした後、お弁当箱を自分で出して洗う練習をほぼ毎日繰り返しました。

3ヶ月も続けたのに、上着をかけることさえできるようになりませんでした。それどころか「次なんだっけ?」「次どうするの?」など親の指示を待つ子になってしまいました。自分で考えて行動できる子になってほしいと思っていたのに…。





## ～資料 1～

これまで、私たちは、子どもたちの教育環境を少しでも豊かにしようと、数多くの保護者と向き合ってきたが、その過程において、保護者には大まかに養育の傾向があり、養育の傾向に応じてどのように対応したら、伝えたい内容が一番相手に伝わるか模索してきた。その成果を保護者の養育の傾向別にしてここに記すので、保護者にかかわる際には参考にしてほしい。

次頁の表では、最初に保護者の相談意欲があるかないかについて分けている。会えばすぐに話しかけてくる保護者もいれば、教師と目を合わせることさえ拒む保護者もいる。相談意欲があればよいというものではないが、相手側から積極的にかかわってくるか、こちらからアプローチをしなければ関係性が作れないかでは、かかわり方は大きく異なる。

次に子どもへの認識が高いか低いかで分けている。目の前の子供の行動に対して発達の見通しをもって理解しながら子どもに接しているか、全く子どもの発達について認識がなく、子どもの行動を真っ向から否定してしまったり自分の考えを押し付けたりしているかによっても支援の方法は異なる。

これらの分類から保護者の養育の傾向を大まかに分けて、支援の方法を示している。しかし、これは保護者との接し方のマニュアルではないので、すべての保護者がこの表にそのままあてはまるわけではない。「気になる子」の理解を深めるときと同じように保護者一人一人の特性を理解し、その保護者がなぜそのような言動を起こすのかを把握し、子どもと保護者の関係をよく考えながら、その子の教育環境がよくなるために保護者に何をどのような方法で伝えたらよいのか考えることが大切である。そのことを心に留めながらこの表を活用してほしい。また、この表はカウンセラーと相談者のように、まったく接点のないところから関係性を創っていくものではなく、あくまでも大切な子どもを教育機関に通わせている保護者と教師の関係を大前提としている。



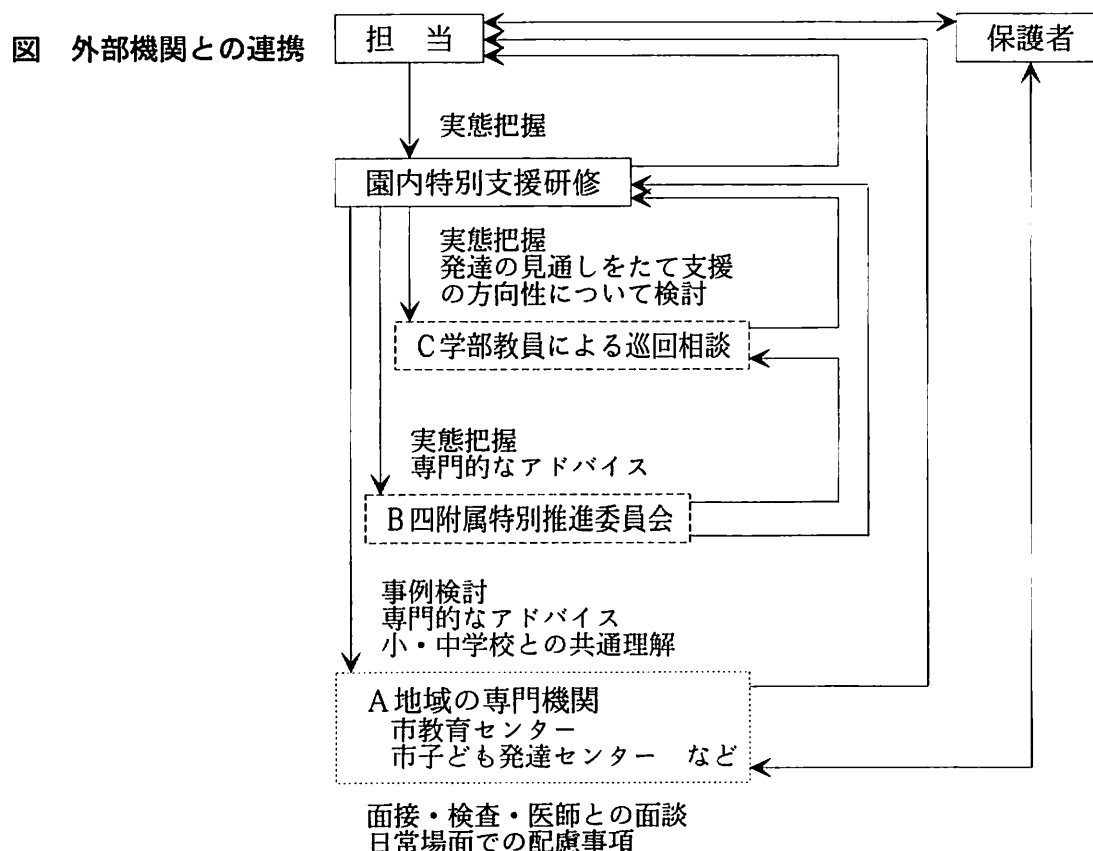
## 保護者の相談意欲による支援の方法の違い

		相談意欲が高い		相談意欲が低い	
子どもへの認識		認識が高い	認識が低い	認識が高い	認識が低い
保護者のタイプ		子どものことを真剣に考え前向きであるが、神経質であり、過敏になりすぎて、いろいろな人にすぐに相談する。	気軽にいろいろと相談してくるが真剣さが見られない。子どもの状況が理解できず、何度も説明しなければならないことがある。	子どものことを心配しているが、自ら相談してくることはない。また、世間体を気にして隠そうとする。	子どものことが見えていないので相談しようと思わない。子どものことを話すと周りのせいにする。
支援の方法	関係性	保護者の悩みを教師が共感し、保育者としての立場を話すことで安心させる。（保育の専門家と相談者的な関係）	友達のように話し相手になりながら、保護者に真剣に考えてもらいたいポイントを伝えるなど、教師としての立場を守りながら接する。（教師と保護者的な関係）	普段から、気軽に声をかけ、本音で話ができるような関係をつくる。（親友的な関係）	日常的に会話をし、何でも話ながら子育てのアドバイザー的な関係になる。（子育てアドバイザー的な関係）
	伝える内容	共感しながら情報を整理し、発達の見通しを具体的に伝えていく。また、相談する機関を紹介する。	子どもたちの立場にたって、その必要性を訴えて、教師としての見方を伝えることで、子どもへの認識を高めていく。	保護者の子育てをねぎらいながら、子どもの課題を乗り越えるための具体的な方法を伝えていく。	日常的に子どもの発達について理解が深まるように、分かりやすく話す。
	伝える方法	保護者の悩みに真剣に向き合い、保育者として接することで安心させる。専門書や専門家の話を引用しながら、条件が整った場所で落ち着いて話す。	教師が毅然とした態度で子どもの困り感を真剣に話す。教師としての見方を伝えることで、子どもへの認識を高める。場合によっては両親を呼んで話す。	他の人に分からないように配慮したり、場所や時間、方法に配慮する。話し方も共感し受容的な態度で行う。	日常的な会話の中で、子どもの様子をこまめに伝えていく。子どもの発達に関心が高まるように話す。

### 3 外部専門機関と連携していくために

気になる子を理解し、援助の在り方を探り、保育の工夫や保護者の支援などに様々な方法で取り組んできたが、あまり変化が見られない場合や援助の方向性等に悩んだり困ったりしたときには、幼稚園以外（ここでは外部と表現する）の専門機関と連携する方法がある。園内だけではなく専門的な視点で見ってもらうことで、気になる子の特性をより理解し支援のポイントについてのアドバイスを得る機会となり、『気になる』姿を曖昧にとらえではなく専門的な言葉で説明してもらうことで、自分たちの保育の方向性が見えてくることもある。また、保護者自身も、専門家から子どもの特性や子どもへのかかわり方を具体的に聞くことで、その子の特性を理解し受け入れられたり、子育ての苦労や悩み、不安感を受けとめてもらうことで安心して子育てすることができたりするであろう。

ここでは、幼稚園以外の地域の専門機関との連携（図のAの部分）の実際と四附属特別推進委員会（図のB、Cの部分）の活動について述べたいと思う。



#### (1) 地域の専門機関との連携（図 外部機関との連携のAの部分）

##### ①地域の専門機関とは

ここでの専門機関とは、地域にある公的な専門機関であり、臨床心理士や専門医師、言語聴覚士、理学療法士、保健師等のメンバーで構成され、子どもとその保護者、教育関係者の相談に応じ適切なアドバイスや発達検査、診察等を行ってくれる機関をいう。

本園では、地域にある専門機関のパンフレットを作成し（P61資料2）、保護者に専門機関への相談を勧める際に活用している。

## ②専門機関との連携の実例

保護者に専門機関を勧める際の留意点については、『2 保護者を支える』の部分で詳しく述べている。ここでは、その後、専門機関とどのような流れで連携を図っていくか、また、専門機関と連携を図ることで保育者や保護者、子どもがどのように変化していったか、連携の質を高めるためのポイントについて、あきこの事例をもとに述べたいと思う。

### 専門機関に行くまでのポイント

次から次へと関心が向いてしまうあきこ  
(年長児、5月)

あきこは、目に入ったものにすぐに反応し興味・関心のおもむくままに動き出してしまい、一つのことじくりと取り組むことが苦手であった。また身の回りの始末ができず、あきこの持ち物が見つからなくて困ることが頻繁に見られた。幼稚園では、あきこがじくりと取り組め落ち着ける環境を工夫したり、身の回りの始末を一緒にしたりしていたが改善されなかった。

保護者：母親からは年長児になったことや小学校への入学が心配なこと、今後、子どもにどう接したらよいかとの相談を受けたので、良い機会であるので専門機関に相談しアドバイスを受けることを勧めた。

### 専門機関の紹介 その子に応じた相談機関を紹介する。

#### ★第1回目の相談

十分に保護者と話し合いを重ね、専門機関に相談することになった。相談機関は、あきこが年長児であり、保護者が就学のことを心配していたので市教育センターの相談機関を勧めた。相談機関には保護者から連絡をして予約をとってもらった。(保護者の了解があれば教師から予約することもできる)

本人と保護者が相談に行くにあたって、事前に相談機関から幼稚園でのあきこの様子がききたいと担任に連絡があった。(担任と相談員が連絡をとることも保護者の了解が必要)

### 専門機関への連絡 事実を伝えるとともに自分がこれまでその子をどう理解しどのような保育を展開してきたのかを説明する。

担任：さっきまで夢中になって絵を描いていたかと思うと次の瞬間にはままごとに入っていて、ままごとがしたかったのかと思うと、外に行ってくると言って飛び出していってしまうんです。一つ一つの出来事があきこの経験として蓄積されていないのではないかと心配しています。そこで、なるべく情報を遮断して、一つのことじくりかかわれるような環境を準備しましたが、なかなかうまくいきません。

相談終了後、相談機関からあきこについて担任に連絡があった。

### 専門機関に相談した後のポイント

相談員：相談結果をお知らせします。次のことが分かりました。

- ・情報がたくさん入りすぎてしまい、そのことを整理するのが苦手である。
  - ・自分に自信がないのですぐに「できない」という。
  - ・注意してよく見ることが苦手で、おおまかに形などをとらえることはできているが、似ている形だと混同してしまう。
  - ・原因があって結果があるのだが、結果のみに注目し、その裏にある原因にまで着目できにくい。
- これがあきこちゃんの特徴です。

専門機関の  
アドバイスを  
生かす  
アドバイスを  
保育の中に  
どう生かせる  
か考えて実行  
するのは担任  
であることを  
忘れてはなら  
ない。

このとき、保育のアドバイスとして次の四つを受けた。

相談員：普段の生活で特に心がけてほしいことは次のようなことです。

- ・本人の自信につながるようなかわり方をしてほしい。
- ・善悪の判断は「いい」か「悪い」かで知らせ、あまり言葉は増やさない。
- ・母親が「あきこはこういう子でこうあるべきである」と断定しているが、あきこはそういう子ではない。その割には母親は自分の子育てに自信がなく、どのようにあきこに接していいか悩んでいる。母親の理解者になり、子どものいいところを積極的に伝えていながら、具体的な接し方についてもアドバイスをしてあげてほしい。

アドバイスを受けた後保育のポイントと具体的な方策を整理してみた。

- ・保育室の一面に区切られた空間をつくり他の情報に惑わされないような場を作っておく。夢中になっているものがあるときにはその場所で行うように誘う。
- ・あきこの得意なことを保育に積極的に取り入れる。
- ・常に肯定的なかかわりをする。
- ・環境を工夫してできるだけ言葉での指示を減らす。

また、保護者も相談を受けた感想を次のように述べている。

保護者：こんなに真剣に子育ての悩みを聞いてもらったのは初めてです。今まで周囲の目を気にしすぎて「こうしなさい」と押し付けていたのだと反省しました。また他の子と自分の子を比べて「できない」ことばかりを並べていました。もっと本来のあきこの姿を見つめてゆっくり付き合ってみようと思いました。



担任は保育を変えてみた。また保護者もあきこへの接し方を変えてみた。するとあきこの行動に変化が見られてきた。

#### 「絵本を持ち歩いて」（5歳児9月）

絵本のコーナーで絵本を読んでいる。あきこにはお気に入りの絵本があり、その絵本のイメージから固定遊具を雲に見立て、友達と遊んでいる。これまでほとんど友達とかかわりがもてなかったあきこだったが、絵本のイメージを手がかりに友達との接点が少しずつもてるようになってきている。

保護者：あきこが絵本に興味をもったことに気付付き、家でも読みみかせをしたり図書館に通ったりしている。

## ★第2回目の相談

第2回目の相談の日が近づいてきた。前回と同じように相談機関から担任にあきこの様子を教えてほしいと連絡があったので、先の事実を伝えた。それと同時にまだ自分に自信がなく、新しい経験に向かうときには「できない」と言って投げ出すことが多いこと、少なくなってきたとはいえ、周りの状況を感じることができずに突発的な行動にでてしまうことがまだあることを伝えた。

相談終了後、再び相談機関から連絡があった。

相談員：前回と比べて伸びた部分がありましたのでお知らせします。

- ・語彙が増えた。特に形容詞が増えた。心に余裕がでてきている証拠である。
  - ・一つのことへの集中時間が5分～10分程度伸びている。
  - ・人を信頼しようとする気持ちがやりとりしている間に垣間見られる。
- 以上のことから、こちらの話に耳を傾けてくれるのでやりとりが成立するようになりました。

一方、あきこのこれからの課題も見えてきましたのでお知らせします。

- ・「こうしたらこうなるかもしれない」と物事を推測して行動することは苦手である。行動してから「やってしまった」と思うのだが、そのときどうしてそのような結果を招いたのかはわからず、大人が怒っているから悪いことをしたという程度の理解にとどまっている。もしかしたらあきこの弱い部分であるかもしれない。友達と一緒に心地よく過ごすためには善悪の判断が必要なので、はっきりと良いことと悪いことは教えた方がよいと思う。
- ・友達と遊びたいという気持ちを強くもっている。そのような機会をたくさん作ってほしい。
- ・全体的に発達はやっくりなお子さんなのであせらずにこのままの状態ですべてを続けてください。

保護者を  
支えて  
専門機関に  
行こうとする  
保護者の思い  
を支えていく。  
また、保護者  
が受けた専門  
機関からのア  
ドバイスを分  
かりやすく説  
明する。

そして、母親からも連絡を受けた。

保護者：いつでも支えてくれて自分の味方になってくれる人がいると思うと心強いです。あきこに関してもとてもよくなったと言ってくださって…。あきこが興味をもったことに一緒に楽しみながら付き合うようにと言われました。後は家の中で役に立つとあきこが自覚できるようなお手伝いを見つかることを宿題に出されました。がんばってみようと思います。

担任：あきこちゃんがよくなってきたのは、お母さんががんばっているからですね。あきこちゃんは、今、編み物に興味をもっているから、一緒に何かを作ってみてはどうですか？ それから、家での手伝いはあきこちゃんが「できた」「これをする」と家族のみんなが喜んでくれる」という思いがもてるようなものかいいわ。例えば、テーブルを拭くとか、お箸を並べるなどどうかしら。

専門機関の  
アドバイスを  
生かす  
専門機関か  
らのアドバイ  
スを保護者か  
らの情報を生  
かしながら保  
育を再構成す  
る。

相談員の方のアドバイスと保護者からの話を受けて、保育の方向性は今までどおりでよいのではないかと思ったが、新しい情報をもとに、これまでの保育を再構成してみた。

- ・あきこが興味をもったことを保育の中に取り入れ、同じような興味をもった友達2、3人とかかわれるように、場をつくる。そのとき、仕切りなどで区切り、情報や人数を調整する。
- ・夢中になれるものを見つけたり、トラブルになる前に声をかけたりしてトラブルの回数を減らして、周りの友達から「こういうことが得意なあきこちゃん」というような印象がたくさんもてるようにする。
- ・遊びばかりでなく、生活の場面ではりきれる場面をつくる。

#### 専門機関からのアドバイス

##### \* 臨床心理士から

あきこの面接と発達検査、保護者のカウンセリングをした。検査の結果はばらつきが大きい。あきこは一度にたくさんの情報を取り入れてしまい、情報を精選することや優先順位をつけて理解することが苦手である。あきこが気が散らないような環境の工夫や指示は簡潔で分かりやすいようにする。また、保護者は子育てについても心配しており、今後も相談を希望している。

##### \* 医師との面談から

あきこは一つのことに集中して取り組むことは苦手だが、あきこの個性の一つとしてとらえていってよい。通常の学級でよいが、小学校にはあきこの特性や支援方法を伝えていく。

母親は、几帳面で何事もきちんとやらないと気がすまないところがある。

専門機関の  
アドバイスを  
つなぐ  
専門機関か  
らのアドバイ  
スを幼稚園だ  
けに留めずに  
小学校へとつ  
なげていく。

#### 小学校につなぐ

あきこの専門機関での検査結果や医師の診断結果などを交えながら、気になることや支援の方法を専門的な言葉で整理し、小学校に伝えた。小学校に入学すると、こんなことに困るであろう、こんな配慮をすることであきこの戸惑いがなくなるであろうなどの具体的なアドバイスを伝えることで、小学校への引継ぎが円滑にいった。



### ③専門機関との連携の質を高めるために

現在、特別支援教育の推進事業等により地域の専門機関は増えてきつつあり、子育てに関する広報誌やインターネット等の情報で保護者への啓蒙もなされてきているが、誰もが気軽に相談に行くまでには至っていないようである。発達障害や気になる子が増えてきており、どの専門機関も混んでいる状況でなかなか予約が取れなかったり、次の相談は数か月後であったりと継続した相談をするのも難しいようである。保護者が専門機関に行くことを了解し足を運ぼうと決心しても、その後の専門機関との連携が円滑にいかなければ効果は望めないであろう。これまで、専門機関と連携してこる中で、連携の質を高めるためのポイントが見えてきたので述べたいと思う。

#### 専門機関の選択

近年、地域には専門機関の数が増えてきているが、実際に相談しようとする際にはどこに行ったらよいのか迷うことがある。「相談してよかった」「子どもがよい方向に向いてきた」といった効果があるためには、その子の特性に応じて適時にその子に合った専門機関を選び、連携することが大切である。保護者を支えてもらう必要があるのか、年長児で小学校入学を控えて就学についての相談をしたほうがよいのか、発達検査を受けたほうがよいのか、医師の診察を受けて治療をしたほうがよいのかでは勧める専門機関が違うのである。また、専門機関にいるスタッフも臨床心理士や専門医師、言語聴覚士、理学療法士、保健師等のメンバー構成も考慮しなければならない。普段から、地域にどんな専門機関があるのかを調べておいたり、専門機関の人たちと顔見知りになっておいたりするなどのネットワークづくりを行っておくと、いざというときに役立つようである。

#### 保護者を支えることの必要性

保護者は、専門機関に相談に行くことへの躊躇や不安感（園より見捨てられたとか、障がい児と認定されるのではないかなど）など複雑な心境であろう。保護者は相談に行っていることを他の人たちには知られたくない、困っている様子を見られたくないと思っていることもある。相談に行き始めたので安心し、専門機関に任せておけばよいというのではなく、相談に行き始めたときにこそ保護者とのコミュニケーションに心がけ、共に子どもを育てていこうという姿勢で、保護者との信頼関係を密にし何でも気軽に話せるような関係をつくっておきたい。幼稚園での様子を細かく伝えたり、保護者が主体的にかかわることで、子どもと向き合い「相談に行ったらよかった」「子育てが楽しくなってきた」「子どもがよくなってきた」と真に思えるのであろう。

#### 情報の共有化と協働

あくまでも保護者の同意を得られた場合のみではあるが、専門機関に子どもの幼稚園生活の中での気になる姿、教師の困っていること、保護者の思いなどを詳しく伝えることで、専門機関も集団の中での子どもの様子や特性についての理解が深まり、より専門的なアプローチが受けられるようである。気になる姿を説明するときにはエピソードを交えながら、どんなときにどんな気になることが見られ、どんな支援をしているのかなどを具体的に話したり、援助で困っていることや悩んでいることなどを伝えたりすることが必要である。また、専門医などに相談するようときには診察の時間が限られているため、保護者の同意を得られるのであれば、気になる姿のエピソードを書面で医師に伝えてもらえると集団の中での様子が分かり、診断や治療の手がかりになると話していた医師もいた。

専門機関・保護者・幼稚園が情報を共有化しチームを組み、それぞれの立場で協働していくことで、ますます良い支援体制が生まれてくるであろう。

## (2) 附属学校園内の連携を軸に

…四附属特別支援教育推進委員会（図 外部機関との連携のBの部分）

### ①四附属特別推進委員会とは

幼稚園では、これまでも幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した教育を行ってきた。しかし、最近の子どもたち一人一人のニーズは更に多様になり、一人一人への理解と援助は幼稚園だけでなく、その育ちを小学校、中学校、その後の社会を見通した支援が必要と思われる子どもも少なくないのが現状である。そこで、平成16年度に設定された教育学部の中期目標の一つとして『特別支援教育推進委員会』を立ち上げ、宇都宮大学附属学校は相互に協力するとともに学部と連携体制を強化し、多様なニーズをもつ子どもたちのために特別支援体制を強化することを目的として研究推進を行っている。メンバーは、宇都宮大学の専門教員、中学校、小学校、幼稚園、特別支援学校の担当者で構成され、特別支援の専門家チームとして活動している。

（図 外部機関との連携のBの部分である。）

委員会の活動内容としては、以下のとおりである。

#### ○特別支援教育に関する実態の把握

各校種で特別な支援が必要と思われる子どもたちはどれくらいいるのか、また、どのような問題があるのか等を把握する。

#### ○各校種の実態に即した校内（園内）支援体制の構築

子どもの教育的ニーズに応じて全教員が共通理解のもと、学校の組織を挙げて支援していけるような体制を構築していく。

#### ○教員のニーズに応じた研修会の実施

教員が抱える問題や課題を解決するための研修会を企画し、現場のニーズに応じられるようにする。

#### ○子ども一人一人の教育的ニーズに応じた指導方法と教材の開発

子どもの教育的ニーズに対する教材を開発し具体的に実践すること、並びに特別な教育的支援の手順や配慮事項等について整理する。

平成18年度からは、特別支援学校から地域支援部担当者が加わり、特別支援教育のセンター的な役割を担うことで、支援の必要とする子どもの訪問観察を行い個別支援計画の作成にかかわったり専門性を生かして実際の支援方法について一緒に考えたりするなど、幼稚園・小学校・中学校の特別支援教育の支援活動が一層円滑に行えるようになってきた。

### ②四附属特別支援教育推進委員会での取組から

#### i) 発達を見通した多方面からの事例カンファレンス

特別支援教育推進委員会では、園内研修で話題になっている気になる子の事例をもとに、自分たちの子どもたちの見方や援助の方向性を再確認している。様々な人と必要な情報を共有し、発達を見通し多方面から一人一人の子どもをとらえていくことでより細やかに実態をとらえ、支援することができると考えている。では、事例カンファレンスの実際について以下で述べたいと思う。

ふみお（年長男児） 家族構成：両親、兄、姉

「ふみおとは遊びたくない」（9月）

さとるが泣いているのでどうしたのかを尋ねると「ふみおがたたいた、ふみおはいつもたたくから遊びたくない」と言う。ふみおはさとると遊びたくて「一緒に遊ぼう」と言ったがさとるは他の子と遊んでいたので断ると、急にふみおがさとるをたたいたようだ。

ふみおの母親は、ふみおが発達障害ではないかと心配し、友達ができないのは、そのせいだというようなことを言っていた。

本園の担任の見取りと援助のポイント

これまでのふみおは、一人で勝手気ままに遊んでいたが、最近は友達が気になり一緒に遊びたい思いが優先し、断られると、思わず手を出してしまうようである。そこで、

- ・一緒に遊びたいときにはどうしたらよいか伝えていく。
- ・遊べないときには、相手に思いがあることをも伝えていくことにする。

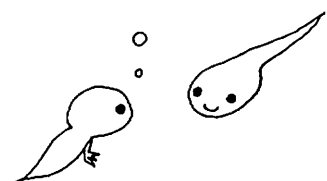
四附属特別支援推進委員会での話し合いでは、

- ・相手に思いがあることを伝えるのは、まだ難しいのではないか。それよりは、友達とかかわるにはどうしたらよいかという方法を知ったり、思いを他のことに移していけるようにしたりすることの方がよいのではないか。今は遊びたくないことが分かればよいのではないか。
- ・母親への支援が必要なようだ。母親の思い込みが大きいようだが、両親の意見は一致しているのか？ 今後、小学校にいき環境が変わることもあるので、母親を支えていくための手立てを小学校にも伝えておいたほうがよいのではないか。

その結果、幼稚園では

特別支援教育推進委員会で両親の考え方を指摘されたので、さっそく母親に確認をしたところ、父親は地域の専門機関に相談することを反対していることが分かった。母親のみでなく父親への配慮も必要であることが分かり、父親と話をするときには本児の姿を丁寧に伝えるようにし、母親と共通理解が図れるように心がけることができた。

その後、保護者は地域の専門機関に相談した。特別支援教育推進委員会の事例カンファレンスでその結果を伝え、専門的な知識があるメンバーなので検査や医師の面談結果はすぐに理解してもらえた。専門機関の話を実際の子どもの姿に置き換えて話し合いができるので、これまでとらえてきた幼児の姿の裏づけができ、援助の方法がより明確になった。また、小学校・中学校教員とも共通理解ができ、今後、支援が継続していけることが期待できた。



ii) 巡回相談と行動観察から（図 外部機関との連携のCの部分）

さらに、特別支援教育推進委員会のメンバーである特別支援学校の地域支援部担当者が、保護者の了解のもとに、ふみおの巡回相談を行い、幼稚園でのふみおの様子を一日観察してもらいアドバイスを受けた。

エピソード

その日、幼稚園では運動会に向けて年長組全員でリレーごっこをして遊んでいた。ふみおはリレーをととても楽しみにしていた。ふみおは自分の番になると楽しそうに走っていたが、自分の番が終わると砂遊びを始め、自分のチームの勝敗は全く気にならないようであった。

特別支援学校T：今のところ、ふみおなりに幼稚園の生活パターンを理解して自分なりに過ごしているようだ。周りの友達もふみおのことを受け入れているようである。

担 任：今日のリレーごっこのようなとき、ふみおはどう思っているのか心配になる。

特別支援学校T：リレーごっこの意味がふみおには分からないのかもしれないが、何となく周囲の雰囲気を感じて状況に応じて行動できることは大切なことである。みんなと一緒に楽しい、走ると楽しいと思っているようである。

担 任：友達がふみおの世話をしようとして、それをふみおが嫌がりトラブルになることがあるがどうしたらよいか？

特別支援学校T：今日の様子では、ゆっくりだがふみおなりに考えて行動している場面が見られた。急がずに、ふみおがどうしたいのかを聞いたり、友達との間を仲介してあげたりするのもよいではないか。

担 任：そうですね、運動会に向けて、ここのところ忙しく過ごしていたかもしれませんが。行事を控えているときにこそ、ふみおに寄りそってあげることが必要なのですね。

事例だけでは、なかなかその子の人となりは伝わりにくいですが、特別支援学校の教師が実際に一日その子の生活している様子を観察してもらおうとその子自身のことはもちろん、その子と周りとの関係などまで理解してもらえた。また、経験豊富でいろいろな事例をもつ教師からのアドバイスは、迷いながら保育をしている私たちにとっては、子どもの育ちの見通しがたち安心して保育をする手がかりとなった。



iii) 一人の子を継続してみていくために

四附属特別支援教育推進委員会では、幼稚園・小学校・中学校における特別な支援を必要とする子の授業や生活の様子を互いに観察し合い、それぞれの実態を知り理解を深めたり、支援の方向性の確認したりすることに役立てている。また、小学校・中学校で支援を必要としている子が幼児期はどうであったのかを振り返る機会にもなっている。

また、特別支援学校からアドバイスを受けて記録を作成し、幼・小・中へと一貫した支援が継続していけるように記録のファイリング化をし、幼稚園と小学校、中学校への接続の在り方とその際の引き継ぎ書などを作成し、今後、活用していく予定である。なお、幼稚園と小学校との接続の状況については次のivで述べたい。

iv) 小学校への接続とその課題

・これまでの接続と問題点

本園では、修了児のほぼ全員が附属小学校、附属中学校へと進学する。修了児においては、これまで、気になる子の普段の様子や発達課題、支援方法、配慮事項、保護者のサポート等を、年長児担任が年度末に小学校の担当者や特別支援教育コーディネーターに口頭で伝達をしたり記録を元に説明をしたり、状況に応じてはスクールカウンセラーや保護者、小学校の担当者を交えて、入学後の支援方針について話し合ったりすることもあった。また、身体的なことについては、本園の養護教諭が小学校の養護教諭に直接伝えることも行っていた。しかし、せっかく引き継いでも新年度になるとその担当者が人事異動でいなくなってしまうたり、特別支援教育の担当係でなくなってしまうたり、担任や学年、その子にかかわる教師に詳しく伝わっていなかったりで、労力をかけ伝えている割には上手く機能していかないもどかしさを感じることもあった。(エピソード1、2)

エピソード1

りゅうたは、母親の感情の起伏が激しく不安定な家庭環境であった。小学校入学の際には、特に配慮してほしいと願い、特別支援教育コーディネーターや1年の学年主任、担任に状況を伝えておいた子である。入学して数日後、りゅうたは門のところで困っているようなので声をかけると、忘れ物をしたので家に帰りたいという。門のところには小学校教師が登校指導をしていたが、りゅうたには気付かないようであった。

エピソード2

入学して1か月が過ぎ、小学校の研究授業を参観することになった。たかこは、年長時から弱視のためにメガネをかけていたが視力はあがらず、入学の際には引継ぎ担当者や養護教諭に配慮してほしいことを伝えてあった子である。しかし、教室内の座席は一番後ろであり、名前の順に並んでいるのであった。たかこは、しきりに隣の子のノートを見たり話しかけたりしているので、学級担任からは何度も注意を受けていた。

そこで、小学校の特別支援教育の担当者と話し合い、接続が円滑にいくようにするためにはどうしたらよいか、接続の在り方について一緒に考える機会を設けた。

・小学校への接続に向けての取組と試行

まず始めに、本園と小学校の特別支援教育担当者で、これまでの接続での問題点について出し合った。

援助が必要な子について、いつ頃、誰に、伝えてよいか分からない。これまでは、その年の担当者同士に任されているので一貫性がなかったようでもある。それに、口頭での伝達ではきちんと伝わっているかどうか不安である。また、学校の形態が違うこともあるので支援が必要と思われる子への認識の違いがお互いにあるようにも思う。

幼稚園

まだ1年生の担任が決まっていない時期でもあり、幼稚園からの話を聞いた担当者が異動してしまったりすると、せっかく聞いた内容が学級担任まで上手く伝わらないことがある。誰が担任になっても困らないように伝わるようになればと思う。また、聞いた人によって受け止め方が多少違っていたり、その子を実際に見てみないと話だけでは様子が分からないところもある。

小学校

小学校には、複数の幼稚園や保育園から入学してくる。それぞれの園での援助を必要とする子のとらえの尺度が異なるので、情報の把握が困難である。特に学級編制をする上で難しく、集団行動ができていくクラスがでてきてしまったりする。

それぞれの立場での問題点が明らかになったことで、それを改善するためにどうしたらよいかについて話し合いをもった。その結果、担当者が変わっても毎年同じような手順を踏んでいけるようにするためには、伝達の時期や方法についてシステム化すれば円滑に接続されていくのではないかと考えた。そこで、今年度は接続のシステム案を共に作成し、四附属特別支援推進委員会で検討後、実施していく予定である。

また、伝達内容については、口頭での伝達だけでなく形式を統一し、誰が担任してもその子の情報やこれまでの支援状況などが分かるように引継ぎ書を作り書面で支援内容が継続していけるようにした。この引き継ぎ書については四附属特別支援教育推進委員会で協議して作成した。また、今後は幼稚園と小学校との接続時だけでなく、その後の支援の様子についても記入し継続して活用できるようにファイリング化を行っていく予定である。

なお、今年度は試行の状態であり、詳しい内容や接続の実際の様子などについては、平成21年度の紀要で詳しく述べたいと思う。



## ～資料 2～

### 発達相談機関のご案内

宇都宮大学教育学部附属幼稚園

幼児期は、個人差が大きく子育てする上で不安や悩みが多々あり、初めての集団生活の中での戸惑いや不安なども起こってくる時期でもあります。お子さんの成長・発達で不安なことや悩んでいることなどがありましたら、下記のような発達相談機関がありますのでお気軽にご相談ください。早期に専門家（臨床心理士など）による子育てのヒントやアドバイスを得ることで、お子さんが尚一層健やかに成長・発達していくことにつながります。

#### こんな事に悩んでいませんか？

ひとり遊びが多く友達と遊べない、よくトラブル（けんか）をおこす、落ち着きがない、かんしゃくやパニックをよくおこす、同じ順序や方法で物事を行わないと気がすまない、慣れない所に行くと不安がったり中に入れない、困っている癖・行動・こだわりがある、会話になりにくい、発音がはっきりしない、体の動きが不器用である、睡眠リズムが不規則、食べ物でひどい好き嫌いがある、入学を控えて気になることがある、など

#### <主な相談機関>

\* 予約制なので、事前に電話で予約をとってください。また、相談は秘密厳守で、費用は無料です。

#### 5歳児発達相談会

場所：宇都宮市子ども発達センター（鶴田町970-1）

内容：年中児の発達相談（ことば・運動・行動面など）ができます

☎ 647-4720

#### 子どもの発達相談

場所：宇都宮市子ども発達センター（鶴田町970-1）

内容：幼児の発達相談（ことば・運動・行動面など）ができます

☎ 647-4720

#### 教育相談室

場所：宇都宮市教育センター（天神1丁目）

内容：年長児の発達相談や就学相談（小学校入学に関しての相談ができます）

☎ 639-4380

#### 幼児の発達相談

場所：とちぎりハビリテーションセンター（駒生3337-1）

内容：子どもの発達に関する検査・診断・治療・相談ができます

☎ 623-7254

#### 子どもと保護者の教育相談

場所：栃木県総合教育センター教育相談部（瓦谷町1070）

内容：子どもの発達に関する相談・遊戯療法・訓練等ができます

☎ 665-7210

#### 早期発達相談

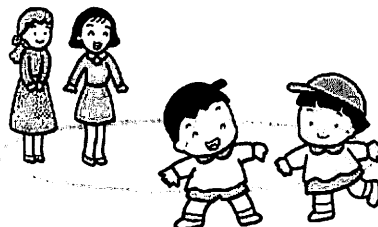
場所：宇都宮大学教育学部特別支援学校（宝木町1丁目2592）

内容：就学前の乳幼児の発達相談ができます

☎ 643-1481

子どもの気質やタイプを知って、その子の良さを生かしながら子育てをすると、もっと子どもは伸びるのね。専門家のアドバイスが具体的にとてもわかりやすいわ。

私は、子育ての悩みを聞いてもらって気分が楽になったわ。子どもの発達や成長と一緒に考えてくれるのがうれしいわ。





では、実際に専門機関を利用した保護者はどう思っているのだろうか。保護者の声をいくつか掲載したいと思う。

わが子は家では元気なのに、幼稚園ではなかなか自分が出せず友達づきあいが上手くできない…。このままでは、「幼稚園がなんだかあまり楽しくなかった」という思いで終わってしまいそうでした。そこで、担任の先生の薦めもあり、年長の夏から冬にかけて相談とグループ活動という形でお世話になりました。

残念ながらこれを通して、わが子が劇的に変わったということはありませんでしたが、「教育センターに行ってもよかった」と思うところがあるのでいくつか述べたいと思います。

一番良かったことは、4回にわたるグループ活動をわが子が楽しんでできたことです。なんらかの理由で、翌年から始まる学校生活を送るのが不安な子ども達が7、8人。先生の指示に従って机に向かっての作業と体を使ったルールのあるゲームを行いました。

見たところ、どの子も何か不安があるのかしら、と思う普通の子ども達。わが子もその中で楽しそうに活動していました。「よく知らない友達の中で楽しく活動できた」という自信にもなったと思います。私にとっても「大丈夫!」という安心になりました。

それから、適性検査や面接によりわが子の弱点に分かり、アドバイスを受けられたことです。子どもへの声かけなど、家庭だけでなく担任の先生にもお話しして協力していただくことができました。

それからもう一つは、専門の方に相談することに抵抗がなくなったことです。「やはり最初は専門の施設にまで行かなくてもいいかな」「私が責められるのでは」という気持ちもありました。しかし、そんなことは全く無くよく聞いてくださって、わが子のことを認めてくれるのでよかったです。

小学校に入学してからも専門の先生にアドバイスをいただこうと思い、幼稚園でも毎年お手紙が出ていますが、「スクールカウンセラーによる教育相談」にも気軽に相談することができました。この時は子どもも徐々にたくましくなっていて、私の不安解消のためのカウンセリングという感じてした。スクールカウンセラーは相談機関の先生なので、横のつながりもあり心強かったです。

子育てにはまだまだ不安や悩みがありますが、また何かあったら相談してみようという心の支えになっています。

#### 相談機関を利用して

施設を利用した感想については、“得をした”と同時に“感謝している”という言葉に尽きます。日常において、自分の子どもの能力を把握でき、かつ、専門家の臨床に基づく意見やアドバイスを得られる機会はなかなかないと思うからです。当たり前ですが、専門家が「我が子をテーマに話し合い」をしてくれるわけで、検査結果に基づき、子どもの特徴や長所、弱点を解り易く解説してくれます。私としては、データに基づく意見や指導のほうを受け入れやすい性格であったため、説得力もあり満足感も大きかったです。この相談を受けたことで、大きく3つの収穫がありました。

まず1つ目は、明らかに「子どもが理解しやすくなった」ということです。自分ではいけないと解かっているんですが、子どもの行動を理屈で理解したがる私にとって、「子どもの行動に対する何故?という疑問」が明らかに減りました。我が子の思考パターンや特性が理解できていれば、子どもが採った行動・選択がなんとなく理解できるし予知もできます。子どもの立場から、理屈立てができるようになったことで、子どもの採った行動が評価できるようになりました。我が子の数少ない経験から導き出された行動が、高く評価できることも最近はありません。要は、かわいく思える機会が増えたということでしょうか……。

2つ目は、「安心して子育てができるようになった」ということです。子どもの行動が予想できれば、事前に的確なアドバイスができます。以前は、あらゆるパターンを想定し、無駄なアドバイス（子どもにとっては理解不能な助言）を沢山しては、あれこれ心配だけしていました。しかし、最近は、ここだけ気を付けて欲しいというポイントを説明し、後は子どもの判断に任せられるようになりました。親はいつまでも子どもの前に立って、降り懸る災難を未然に防いであげることが到底できません。だからこそ、生きてゆく上で必要な技術や知恵を身につけさせたほうが、子どもの利益になります。最近は、子どもの成長も手伝ってか、子どもに助言をし、後は、他人の力も借りることを想定して子どもの行動を見守る心構えができてきました。

3つ目は、「子育てに夢が持てるようになった」ということです。子どもの性質に不安を抱えていた時は、子どもの将来に対し、どちらかと言うと否定的な見方が多かった様に思います。しかし、現在は、我が子の能力や弱点を把握した上で、将来のビジョンが思い描けるようになりました。必ずしもそうならないとは解っていますが、前向きな将来像が今は描けるようになりました。従来、子どもの未来は希望に満ちたものであるはずで、子どもが望めば、溢れる限りの夢や希望が存在し、それに向かって努力すれば、限りない選択肢が広がって行くんだよ…なんて事を子どもに説いて、明るい未来像を描かせてあげるべきなのかもしれません。以前は、それすら自分の中にできませんでした。しかし、現在は、子どもが望む限り、あらゆる経験をさせてあげたいと思えますし、夢を叶える為の努力に対し、共感したり応援したいと心底思える状態にあります。

親になって解かった事は、期待感をもって子育てができないというのは辛いという事です。大きな期待でなくともよいわけで、ささやかな期待感の連続で、親は日常の子育ての中で励まされる様に思います。今回、相談をしたことで、今まで抱えていた不安感はかなり解消されました。と同時に、自分の子どもの将来に希望を見ることができるようになりました。

子どもに不安を少しでも抱えているという方が居られるのであれば、ぜひ、施設の利用をお勧めします。専門家の意見は、実に的確です。世間の無責任なうわさや情報より、多くの臨床経験に基づく助言や検査のほうが、短時間であれ有効に感じられるはずで、拙文でしたが、相談施設を利用した感想を率直に述べさせていただきました。

わが子への沢山の悩みを抱えて日々生活していますが…。悩みを抱える度に、家族や親しい友人、担任の先生へ相談し次の一歩へ踏み出していました。わが子も日々の生活の中で、悩んだり喜んだり怒ったり考えたりと色々な事を学び葛藤して一生懸命に過ごしています。親として子どものために何ができるのか？そんな事を考えている時に、担任の先生から相談機関を紹介していただきました。センターは個室になっていて、保健婦の方が1対1で子どもの様子を見ながら一緒に遊んでくれます。子どもの事を身近にいる人以外に相談する機会が無かったので、どの様に話していいのか戸惑いましたが、心理士の方を前にしたら、今まで子育てで悩んだ事を無我夢中で話をしていました。1時間の相談時間の中で、今までの子育てをふり返り、これから子どもとどのように向き合えばいいのかについて一緒に悩み考えてくれました。一度きりの相談ではなく、これから何度も訪れたいと思い、相談をお願いして、その後も2回ほど行きました。担任の先生からも、心理士と保健婦の方へ幼稚園での子どもの様子を話してもらっていますので、相談時間も無駄がなくスムーズに進みました。相談機関を利用してから1年が経ちますが、私も子どもも大きく成長したと実感しています。子どもも相談機関に一度訪れただけで、とても楽しかったから、もう一度遊びに行きたい！と言っています。訪れる度に、子どもの成長を喜んでくれる心理士と保健婦の方、そして幼稚園の先生がわが子の成長を見守ってくださることで、私たち親子は今日まで伸び伸びと過ごしてこれました。